

九州大学総合研究 博物館ニュース

October 2006 No.7

大学博物館のイメージ

九州大学総合研究博物館 館長 嶋 洪



博物館行きとか博物館的という言葉に一般に代表されてきた博物館の古いイメージは、近年ずいぶん違ったものになってきているようである。それは多くは、当の博物館で働く人たちの活動、地道な研究や斬新な企画、展示などの絶えざる努力によってもたらされてきたものであるし、また、近年の文化的、科学的な知識に対する一般の期待の増大といった時代的な背景によっている所も大きいだろう。同様のことは、大学博物館についてもいえる。いやむしろ大学博物館、特に多くの国立大学における大学博物館は、ほとんど無の状態から出発して、この10年ほどの間に、多様に発展し、そのイメージを形成しつつある。もちろん、はるかに昔から独自の博物館を持ち、先進的な取り組みを進めてこられた大学があることは承知している。しかし、この10年ほどの間に新設、拡充された大学博物館が数多いことを考えれば、従来の博物館に対するイメージが、大学内でも急速に変化しつつあると考えてもおかしくはない。大学内には九州大学を例にとっても、数十年にわたる博物館設立要求という準備期間があった。それでも博物館に対するイメージが、従来の一般のイメージを変えつつあるのは、実際に博物館ができ、それが活動を始めてからのことではなかつたらうか。

大学は研究・教育の場であるとともに、社会への主体的な貢献が求められる。大学では社会的に有用な最先端の研究が行われているし、同時に、直に社会に還元することのできないような基礎的な研究も進行している。これらの研究成果や研究のプロセスを、目に見える形で大学外に情報として発信することは、大学の研究の社会への還元という点で大きな意味を持つし、それを行うには、大学博物館は非常に有効な施設である。もちろん博物館が、学内の様々な情報、資料について正確に、系統的に把握・管理していることは欠かせない条件である。

九州大学総合研究博物館は、展示のための独自の建物を持たない博物館として発足し、すでに6年が経過した。こ

の間、展示場を持たないというハンディを、サテライト展示、出張展示、公開講座等の仕掛けで、むしろプラスの方向へ向けてきたように思える。

もちろんそれは博物館員の非常な努力とともに、大学当局の支援、そして地方自治体等関係者との協力があつてのことではある。このような形の多様な情報発信方法は、今後も継続し、発展させなければならない。それでもやはり、博物館に独自の展示場は欠かせない。大学博物館に行けば、その大学の研究・教育活動、研究成果や研究状況、歴史を直接見ることができるというのは、大きな魅力である。新しいキャンパスにふさわしい、広い展示場をもつ博物館は、私たちの大きな期待である。

また、一般にあまり認識も評価もされていないように思われるが、博物館に欠かせないものは、収蔵スペースである。大学内のさまざまな研究成果、その成果を生み出す元となった機器や資料、標本などは、大学のみならず社会の貴重な財産である。この中には、研究発表後、永久に保存されるよう義務づけられた標本や、今後も引き続いて研究に使われるべきものが含まれている。このような資料を大学内で一括管理し、常に利用にたえるような状態で保管することは、博物館のもう一つの重要な任務であるし、これが大学からの情報発信の資源となることはいうまでもない。

博物館では研究は不可欠である。博物館事業の研究はもちろん、館員自身の活発な研究は博物館の存在を活性化させるし、大学博物館の特色を際立たせる所となる。それは大学全体にとって是非必要なことである。

大学全体に対する研究・教育、成果の公開そして資料や情報の保管・管理など、大学博物館の主要な任務は、大学自体のそれと相似である。大学博物館が大学を代表する存在として認識されるべきだと考える所以である。

